



国際

沿岸レポート

第7回日韓沿岸技術研究 ワークショップの紹介

一般財団法人沿岸技術研究センター
主任研究員 森本 悟司

1. はじめに

韓国海洋科学技術院 (KIOST)、国立研究開発法人港湾空港技術研究所 (PARI)、一般財団法人みなと総合研究財団 (WAVE) および一般財団法人沿岸技術研究センター (CDIT) は、年1回の合同ワークショップ (沿岸防災、沿岸域管理、沿岸環境及び技術開発の4分野) を通じて、技術交流を行っています。第7回目となる今年は、KIOST本部のある韓国・釜山での開催となりました。日本側からは13名が参加し、12月17日から19日までの3日間、ワークショップの他、釜山港湾公社 (Busan Port Authority) の訪問・釜山北港 (Busan North Port) の船上視察を行いました。

2. ワークショップ

開会セレモニーで、講演者および関係者一同による記念撮影が行われ、活気の中、ワークショップが始まりました (写真1)。ワークショップのプログラムは、1) Coastal Disaster and Response、2) Coastal Management、3) Coastal Environment、4) Technical Developmentの4セッションで構成され、各3編・計12編の研究の成果発表がありました。

Coastal Disaster and Response のセッションでは、Movable Barrier (可動式防潮堤) の開発と導入に関する研究が報告され、整備を実現する上での技術面・コスト面の課題に対し、活発な議論がなされました。

また、Technical Development のセッションでは、Sea-water Battery System と題した発表で、蓄電池の陰極部分を海水に置き換えることで従来の蓄電池に比べ大きさ・コストを半分にするという、エネルギー分野での挑戦的な研究紹介がありました。一日を通じて、参加者は各発表に大変関心を持って聴講していた様子で、予定時間を超過するほど活発な討議が行われました。

テーマごとの個別の講演の他にも、KIOSTのLee副院長による基調講演「KIOST Vision 2030」では、KIOSTにおける中長期計画の展望と重要推進課題の紹介があり、2030年を見据

えた未来志向的で挑戦的な研究プロジェクトに対する意気込みが紹介され、非常に興味深い講演でした。

また、PARI下迫特別研究主幹による特別講演「Recent disasters caused by storm surges and waves in Japan」では、2018年及び2019年に、日本で甚大な被害となった高潮・高波災害について、現在、取り組まれている新しい設計思想をご紹介いただきました。近年、沿岸災害が大きくなっていることに対しては、韓国側からも大きな関心が寄せられました。



写真1 講演者および関係者一同

3. 釜山港湾公社の訪問・釜山北港の視察

期間中、釜山港湾公社の訪問及び釜山北港の視察を行いました。釜山港湾公社では、コンテナ取り扱い個数世界6位 (2018年) という釜山港について、現行及び将来の整備計画についての説明がありました。特に釜山新港 (計画予定の31バースのうち23バースを運営中) については、2025年までに31バースまで完成する計画の説明を聞き、日本側からも活発な質疑を行いました。釜山北港では、再開発中の客船ターミナル (写真2) や稼働中のコンテナターミナル (写真3) を船上より視察しました。港湾関連以外に様々な海洋関係の設備が揃う釜山港の施設を、参加者は高い関心を持って船から見学しました。



写真2 再開発中の客船ターミナル 写真3 稼働中のコンテナターミナル

4. おわりに

WAVE並びにPARI職員の方々には、準備を含めて期間中大変お世話になりました。お陰様で大変有意義なワークショップになったことはもちろんですが、沿岸域の研究開発に携わる日韓の技術者交流が友好的かつ着実に進められていることを改めて実感したワークショップとなりました。厚く御礼申し上げます。また、KIOSTのKim院長、Ahn名誉研究委員にも大変お世話になりました。ここに記し、謝意を表します。